

57 デッサン素人の美術史家ベッローリ

— 《聖マタイの召命》 誤解の遠因 —

2023

真鍋友範

1 美術史家ベッローリという人物

一般には知名度は低いのだが、イタリア・ルネサンスからバロック期にかけての西洋美術史を知る上では有名なベッローリという人物について、ウィキペディアの解説を引用して紹介する。



美術史家ベッローリ

ジョヴァンニ・ピエトロ・ベッローリ(Giovanni Pietro Bellori、1613年1月15日 - 1696年2月19日)は、17世紀イタリアの美術理論家、古代ローマの美術品収集家、美術史家である。1672年に出版された『当代の画家・彫刻家・建築家の生涯(Le vite de' pittori,

scultori et architetti moderni)』などを執筆した。プラトニズムのような理想主義の立場をとり、ラファエロ、アンニーバレ・カラッチ、ニコラ・プッサンらの古典主義を賞賛し、カラヴァッジオやジャン・ロレンツォ・ベルニーニの作品を否定した。

略歴^[編集]

ローマで生まれた。ドメニキーノ(1581-1641)から絵を学んだと考えられていて、同時代の画家、ジュゼッペ・ゲッツィ(Giuseppe Ghezzi: 1634–1721)はベッローリを画家としているが、作品は1点残されているだけで、ベッローリは自身が芸術家ではない最初の美術理論家の一人であったとされる。1632年から美術品収集家、歴史家、小説家のフランチェスコ・アンジェローニ(Francesco Angeloni: 1587–1652)の助手として20年の間、働き、アンジェローニの養子となり遺産相続人に指名されるほどになった。1652年にアンジェローニが亡くなった後、アンジェローニの親族からの裁判で、ベッローリは邸だけの相続は認められたが、美術収集品は親族のものになり、売却された。1652年にローマのアカデミア・ディ・サン・ルカの事務局長に指名され、何度か再選された。1670年に教皇クレメンス10世によって、ローマの古美術品の管理者(Commissario delle Antichità)に任命された。画家のコンサルタントとしても働き、友人の画家、カルロ・マラッタがアルティエリ一家の宮殿の天井画を制作するのにも関与した

1672年に出版された『当代の画家・彫刻家・建築家の生涯(Le vite de' pittori, scultori et architetti moderni)』ではニコラ・プッサンやアンニーバレ・カラッチ、ピーテル・パウル・ルーベンス、カラヴァッジオらを論じ、17世紀のローマの美術に関する豊富で重要な資料になっている。1693年にはローマの古美術に関する著書を出版した。

引用元：フリー百科事典 Wikipedia 2023

上記解説にもあるが、【17世紀の美術史家ベッローリは、芸術家でもあった16世紀の美術史家ヴァザーリとは異なり、美術理論家であって、芸術家ではない人物。】いわば、デッサンの素人だ。その素人が、カラヴァッジオを酷評した人物であること。これをまず把握しておく必要がある。

日本の著名な西洋美術史の専門家石鍋真澄氏は、17世紀イタリアの美術史家ベッローリのカラヴァッジオ評は、【悪意と偏見に満ちている*】と、判断されている。この判断については、私も同感だ。

*ネット；

2 彼は《聖マタイの召命》を正確に理解していたのか。

カラヴァッジョに対する【悪意と偏見】を持つ美術史家ベッローリが、正しくカラヴァッジョを判定できなかったことは明らかだ。

まず、ベッローリは、聖マタイは中央のひげ男だと判断した。(しかし、マタイは腰を屈めて、机に寄りかかっている眼鏡の収税人だ。)

またイエスはマタイを指差したと判断した。(しかし、イエスの指は指差していない。)

この段階でもう【絵をよく見ない人物であることが明白だ。】

絵を見る能力が低いとする証拠は、他にもある。

イエスの右手は、システイーナ礼拝堂の天井画にある、ミケランジェロの描いた神に手を伸ばすアダムの手と同様とする判断や、カラヴァッジョの描いた納税所の雰囲気、酒場のような場所と判断するなど、【絵を見る能力がとても低い】のだ。

イエスは右手の上腕を回している姿なのだから、前に差し出したのではない。

また、収税所の上半分の場面に描かれているのは、イエスを象徴する窓枠の格子と、高窓から差し込む光に潜む父なる神からの啓示の光が、眼鏡の男の額に当たる点光表現だ。(無駄なものは描かないが、宗教上大切な要素は、欠かさず描いている。【決して酒場ではない、崇高な場面だとする理由だ。】

これらの読解ミスは、ベッローリが、【カラヴァッジョのリアリズムとは何か】、を正確に理解できないことに直結するのだ。

ベッローリの絵画読み取りの判断では、【カラヴァッジョの革新的・先進的表現】は全く浮かび上がらない。

カラヴァッジョは、ダヴィンチの絵画とジョルジョーネ絵画を統合的に進化させた偉大な画家だったと考えられる。分かり易く言い換えると、【正確・リアルな身体表現描写により、動画を表現した革命的な画家】なのだ。

動画というと、現代では映画を連想するが、そうではなく、【時間変化に伴う、段階的身体変化を正確に再現した】ことを指す。

具体的には、【中央のひげ男の2段階の質問動作と、質問されたイエスの3段階の回答動作】が、【結果的に眼鏡の男をマタイとして特定する】、という動画のテクニックだ。

しかも、カラヴァッジョが、【モデルを使って身体動作でリアルに表現したからこそ、構成できた動画の場面】なのだ。

残念だが、芸術家でない、デッサン素人のベッローリは、偏見や悪意が災いし、これらを正確に読み取れなかったのだ。

つまり、同時に芸術家でもあり、デッサンを理解していた美術史家ヴァザーリとは、根本的にその絵画解読能力が劣る人物であったのだ。

3 ベッローリ完全否定からの再出発

現代でも、カラヴァッジョへの偏見に基づいた記述を、そのまま踏襲する記述を行う美術史家が日本に大勢いるが、彼らはもう【ベッローリの呪縛】から逃れられない人達だ。

残念ながら【ベッローリの呪縛】から逃れ、正しくカラヴァッジョ絵画真実を認めると、これまでの絵画判断の誤りを世間に認めることになり、彼らの大学での立場やプライドの理由で、現代日本の美術史家は決して判断の過ちを認められないのだろう。海外の、同じ立場の研究者も同様だろう。また、彼らの弟子たちも同じく、【ベッローリの呪縛】から逃れられない。先代との異説を主張したら、将来の出世の道が外されてしまうから、気の毒な位置にいることは確かだ。

つまり400年間、カラヴァッジョの描いた《聖マタイの召命》への誤った絵画判断を是正できない、正確に絵を読み取ることのできない現代日本の美術史家達は、例えば、ガリレオの地動説を400年間認めなかったローマ・カトリック教会の頑固さと同様、仏教用語ならば、【無作為・怠慢な】無明な立場いるのだ。

結論として、【今後のカラヴァッジョ研究は、17世紀の絵画分析能力のない、イタリア人美術史家ベッローリの、デッサン素人レベルの評論を完全否定してから、再出発すべき】なのだ。

西洋美術史家が、画家カラヴァッジョを社会に紹介する立場なのであれば、真実を伝えるのが専門家の義務であり、放置して良いことではないだろう。
言論の自由はあって良いが、道徳的に正直であることは絶対に必要だ。